第 3 章
合同防災キャンプ 2016
参加者感想

■宿泊研修全般を通じて学んだこと、感じたこと

今回、3 日間だけでしたが、多くの人と交流することができた。このような交流を普段から持つことで、いざという時に助け合える存在になり得るということを念頭に置き、これから生活していきたいと思う。	生徒
地震が起きる可能性―それは「もしも」ではなく、「いつも」ある。ただのアンラッキー、来てほしくないものと考えるのではなく、私たちの生活の一部として考えること。「モシモ型防災」から、「イツモ型防災」へ。「地震イツモノート」より、この言葉がとても心に残った。これからも生活の中で防災について考えていきたいと思った。	生徒
私が一番強く思ったのは、予想で動いていけないということ。「ここまでは（被害は）来ないだろう」と思ったり、「ここなら安全だ」と思わず、災害時は常に危機感を持ち、行動しようと思った。	生徒
感じたことは、津波がもたらした悲しみの大きさ。大切な家族、友だちを奪われた人は、本当につらそうな顔をして泣きそうになりながら話してくれた。それを見詰めて聞いていると、私も本当に泣きそうになった。	生徒
実際に津波等の大きな被害を受けた方々の話を聞き、余り知ることのなかった津波の押し寄せてくる速さや上がってくる高さ等を知った時に、それまでは感じることのなかった津波への恐怖を感じることができた。	生徒
実際に震災に遭った方々の話を聞いて、今の生活、食事、学習できる環境が整っていることが、こんなに幸せなことなんだと思った。それと、備えあればうれいなし !! これを本当に強く思った。自分たちの町は自分たちが守る。そのことを胸に刻み、頑張りたいと思う。	生徒
やはり現場に行くことの大切さを改めて感じた。特に、本校の生徒だけでなく、先生方が大勢参加させてもらうことで、キャンプ終了後に、本校の避難訓練、備蓄物品、避難所の運営関係等、様々な部分について意識が高まった。若い先生方の力はすごいもの。この意識を高めることが、生徒一人一人の命を守る、命を大切に扱う教育につながること実感した。	教員
宮城県農業高校の実習助手の知人に聞いた話だ。津波があっという間に迫ってきたので、必死で松の木に抱きついたが、松の木は端から津波に飲み込まれ、流されていく。幸い、知人がつかまっていた木は流されず、生き抜くことができたという。果たして、そうした状況下で生徒たちを守ることなど可能なのか―それが合同防災キャンプに参加するにあたり、私が最も疑問に思っていたことだ。その答えになるかは分からないが、このキャンプを通して、私に必要なものが多少見えてきた気がする。一つは「ゆるぎない用心」。「首都圏に M7 クラスの地震が 30 年以内に発生する確率は 70%」と、いくら専門家が警告しても、私たちは当たり前の生活がずっと続くと漠然と信じ込んでいる。それがやってきて、自分の信じた未来からレールが外れ始めた時初めて、「とんでもないことになった」と嘆きだすのだ。防災の一番の強敵がこの「日常への過信」だ。それが幻想に過ぎないことを自分自身に、また周りに強く言い続ける必要がある。あとは「覚悟」。そして防災に関する「知識」と「技術」だと、今回多くの方の話を聞いて、痛感した。	教員

私が一番印象に残ったのは、現地の人々の“生”に対する意識だった。宮城県の人たちは、みんな津波に流されている人を見たり、家族を失った人もいて、一度は死を考えたそうだ。しかしそんな経験を乗り越えて、私たちに様々なことを伝えて、自分は偶然生きているのではなく、生かされているということを教えてくれた宮城県の人たちに、とても感動した。	生徒
やはりみなさんが口をそろえていうのは、体一つでいくらでもやり直せるということだった（生きていなければ何もできないということ。）。このことは、首都直下型地震が起きるといわれている東京に住む私たちにもいえると思う。別の人の命も、ものすごく大切だが、まず自分の命のことを考えて行動しなくてはと、強く思った。	生徒
合同防災キャンプで、一番大切なことに気付かされた。それは、大事なものはたくさんあるが、家族の命、自分の命が最も大事だということ。被災した時、私は自分の命より真っ先に家族の命を助けたいと思った。私はまだ若いから、自分でできることはやりたい。でも一番いいのは、家族の命も自分の命も助けること。	生徒
実際に現地へ行き、被災者の気持ち、被害に遭った建物を見て心が痛くなった。その感じたものは、実際に被災地へ行った私たちが、行ったことのない人たちに伝えていかなくてはならないと思った。	生徒
まず、津波に対する意識が変わった。特に津波の色は黒いと聞き、とても衝撃を受け、その津波に飲み込まれることを想像すると、とても怖いと感じた。次に、復興への意欲を強く感じた。私たちが想像する以上に、（被災地の）みなさんが努力し、協力し合っていて、その姿を拝見し、体験することで、こつこつ努力し続ける必要性を学んだ。メディアで聞いたり見たりすることも（被災地を知る、関心を持つ。）きっかけとして大切だが、足を運び、参加することで、地震に対しての認識が変わり、日頃から地震に対しても意識していこうと思えるようになった。	生徒
指針を基に進むことがいかに大切か、感じた。現実的に考えてみれば簡単なことだが、ゴールがなければスタートもできないのだ。だからといってゴールを用意すべき状況でもない今は、いきなりそれを準備することは難しい。だから、やはり臨機応変さと、迅速であることが必須だと考えた。そのためには、常に考え、想定し続けることが、防災に直接的につながっていくのだと学んだ。	生徒
目の前に広がる光景が、想像していたものと違っていて驚いた。本当はもっと復興が進んでいると思った。しかしそこにあるのは、以前にテレビで見た崩壊しかけの建物、14：46 で止まった時計で、家がたくさんあったであろうところはただの更地になっていた。5 年経ってもこれなら、東京で震災が起きたらどうなるのだろうと考えた。また、目に焼き付けたその光景たちを、まだ被災地に行ったことがない人や、後世に伝えていくべきだと思う。	生徒
旧大川小学校の現実を目の当たりにすると、教育という現場では絶対に命を失わせてはいけない。そのための教師に求められる役割、事前の対策といった中でも、常にベストを尽くし続けなければならないと感じた。	教員
宮城県多賀城高校における防災教育の取組が印象的であった。教員自身が、震災を体験しているだけに、避難訓練のやり方一つとっても、実践的な内容となっていた。より多くの人に、一度実際に被災地を訪ねてもらいたいと思う。	教員

私が全体を通して感じたのは、“メディアが私たちに伝えられなかったこと、伝えなかったことの大きさ”だ。3.11 では新聞、テレビ、ラジオ、ネットニュース、様々な媒体が情報量を最大にして発信した。それでも伝えられなかったことは多かった。避難所の様子、状況、必要な物資、これはどうしようもできなかったのか、他に伝えてくれる手段はなかったのか、考えるようになった。そして“命の重さ”とその価値について、なくすことの恐怖等を、これまでになく感じた。ガイドの方が、「ここで○人が亡くなっている」と話されるたびに、今まで自分は物事を軽く見過ぎていたと反省した。	生徒
東日本大震災については、テレビを通じて津波の様子を見たり、仙台に住む身内から話を聞いて知っているつもりだった。でも、実際に現地に足を運んだら、何も分かってなかったと思うほど違っていた。大きな揺れと津波で“多くの人が亡くなった震災”という、簡単な言葉、説明では表せないほどのものだと、目で見て学ぶことができた。たくさんの人が津波に飲み込まれた場所に足を踏み入れるには、覚悟が必要だとも思った。ボランティアを通じて、現地の方の生きる力を感じ、命の大切さを深く学んだ。	生徒
宿泊研修で感じたのは、（震災の記憶が）どんどん風化しているのではないかということ。何より怖いのは、あったことすら忘れられることだ。自分たちでは想像できないほどの命が奪われ、たくさんの宝物や思い出が消えてしまったのに、消えたのではなく、もともとなかったことになってしまうということだ。今回、被災地に行かなければ、私たちもそのことを知ることができなかった。それを知る機会を作っていただけたことに本当に感謝している。	生徒
防災について意識が高まった。避難訓練など、もっと身を引き締めてやっていこうと思う。当たり前ができていることが幸せなんだと思った。食料や電気のありがたみがよく分かった。いつ何が起きるのか分からないので、1 日 1 日を大切に過ごそうと思った。	生徒
以前、「震災を忘れないで」というメッセージを受け取った時、東北で震災を経験した人々の存在を忘れないでということかと思っていたが、それだけではないことを、阿部民子さんから教えてもらった（たみこの海パック／物販支援受け入れ先）。私が生きている間、どこかで必ず、また大きな地震が起こるだろう。まず、自分と家族の身を守ることができなければ、他の人を救うことはできない。一言でいえば、防災の大切さを痛感した研修だった。	教員
震災を乗り越え、その時のことや、これからどう復興したいかを語ってくれた方々は、皆さんとても強かった。しっかり前を向いて歩いていた。自分のことだけでなく、周りの人のこともしっかり考えていた。教員として、自分の考えの甘さを痛感した。やはり社会にとって人は何よりの資源なのだと思う。社会のために動ける人間になりたい。	教員

■宿泊研修全般を通じて学んだことから、今後取り組んでいきたいこと

将来は看護師になり、災害支援ナースとして避難所で活動したいと思っている。このキャンプで被災した人と話し、人の心の底にある傷は本当に大きいものだけど、前を向いて歩き始めている姿を見た。人の心を 100%理解するのは難しいと思うけど、将来、災害支援ナースになったら、人々を手当てすることはもちろん、心理的な面でのケアもしていける被災者の心に寄り添える人になりたいと思った。今後の学校生活では、このキャンプで学んだことを生かし、避難訓練等をまじめにやるように、友達に呼びかけたいと思う。「普段からの意識で助かる命」「若い人たちによって助けることのできる命」。一人でも多くの人が日頃から災害について考えていけるよう発信し続けたい。	生徒
地震や津波は、私が思っていた何百倍も強く恐ろしいものだと分かった。首都直下型地震が来るといわれている昨今、グループワークで学んだことに基づき、今できることとして、水・食べ物・ライトは準備しておこうと思う。また、家族で避難場所について話し合っておくことも必要だ。自分の命はもちろん、家族、近所の人、大切な人を守れるようにしたい。	生徒
ボランティアで小学生に防災を教えているので、今回学んだ、たくさんのことを教えていきたいと思っている。	生徒
私が実際にできることは、今回の合同防災キャンプで学んだこと、被災地に行ったから分かったことを、家族や友だちに伝えるということ。情報をいろんな人に広めていくことにより、少しでも次の地震での被害が減ったらいいなと思う。	生徒
日頃から、家でも学校でも呼び掛けをして、マップなどを作り、対策を考えたりすること、避難訓練も緩んだ気持ちでやるのではなく、すばやく、「現実だったら」という意識で臨むようにしていきたい。	生徒
プロ意識を持って、リーダーシップをとることができる教職員の育成が急務ではないか。また、教員が自ら防災教育を実践できるような職場環境を整えることも、不可欠である。	教員
今回の経験を職場の教職員、生徒にしっかりと伝えていく。日々の訓練等、「決められた行事だから実施する」のではなく、本当に必要なことで、普段からできないようなことは、非常時にもできないということを、実感を持って、周囲に伝えていく。	教員
この東日本大震災での教訓を、いち教員だけでなく、東京都に勤務する多くの教員が共有するべく、行動を起こすことである。宿泊研修後に、この経験を多くの教員と話し、多くの意見を頂いた。生徒だけでなく、教員がもっと現地に赴き、現地を目にすることが大切であろうと考える。写真や記述では分かり得ないことが現地には多く残されている。それを基に、生徒を動かすことができるのではないかというのが、私の考えである。	教員

自分が生徒会の役員ということを活用し、今回学んだことを共有するための取組を、学校全体で何らか実施したい。例えば、防災意識を高めるために、火事を想定した訓練では、模擬の煙を作ったり、1 年生の防災宿泊訓練で今回のキャンプについて講演的なことをし、東北の現状を伝えたりしたい。	生徒
被災地に実際に行ってみると、テレビ、新聞、ネット等のマスメディアの情報だけでは分からない現実や、復興に向けての新しい希望を見付けることができた。自分にできることから少しずつ行っていきたい。	生徒
この研修に参加した生徒は、いずれ社会人になる。このことを忘れずに憶えておき、災害時に利用することができるようにしておきたい。	生徒
今回の経験は、実際に受験にも役立った。宿泊研修の 3 日間での経験を忘れず、将来に生かしていきたい。	生徒
みんなをひっぱっていけるリーダーが必要といっていたが、普段から積極的にみんなの前に出て、ひっぱっていき、もしもの時にリーダーシップが発揮できるよう練習しておこうと思う。人と人との関わりが大切といっていたので、クラスメイトや近所の人との関わりをもっと増やし、何かあったら団結し、協力できるような関係を築いていきたいと思う。	生徒
これから起こるといわれる首都直下型地震の対策をしていきたい。首都直下型地震は、津波などは大きくないものの、日本の大切な機関がダメージを受けるので、町の混乱は免れないと思う。自分の住んでいる地域のこともよく調べ、家族とよく話し合っておくことが大切だと思った。	生徒
大災害が起きたときに、避難者の前に立ち、率先して避難したい。	生徒
自分一人が防災への意識を高めても、自分の心は傷つく可能性もある。そのため、他者を助けることは自分を助けることになるということを忘れずにいたい。そのためにも、一人一人が自分なりの防災意識を持ち、自分自身を大切にしてほしい。大切にしてくれるように働きたい。そうすればきっと他人もまた自分を助けてくれる。他者を助けることは無限に力を生むと考え、これからは他人を自分の一部と考え、大切にしていきたい。	生徒
テレビでの報道がほぼないに等しく、行ったことがある人にしか分からないこの現状を、どうにかしていろんな人に知ってほしいと思った。また、支援物資や募金が決してムダになっていないことも分かった。困っている人がいたら力になりたいと思った。	生徒
今回の研修と日頃の消防団活動の経験を生かして、校内防災組織の充実、並びに活性化を図りたい。防災に関心を持ち、生徒を一人でも増やすためには 1 年次生が行っている宿泊防災訓練の内容の充実が不可欠といえる。	教員

今もまだ苦しんでいる人がいるということを、たくさんの人に伝えていきたい。私一人で伝えても震災の記憶の風化を簡単に止めることはできないが、少しでもそれを止めることができたらいいなと思う。	生徒
宿泊研修で出会った方々とのネットワークを生かしながら、震災から５年目の様子を伝えていく。広くいろいろな場面で発表する。また、大きな災害はいつか必ず起こるから、起こった後に後悔する人がいなくなるように、過去の出来事を教訓として学び、多くの人に知ってもらう。またいつか南三陸を訪れるのもいいし、他の被災地を訪れるのも有効だと思う。後悔しないように生きていくのは決して簡単なことではないが、日頃から心掛けることで、意識も変わり、それが日常の行動や考え方を良い方に変えるきっかけになると思う。	生徒
石巻西高等学校の校長先生のお話によると、これから震災のことを日本だけでなく、世界にも発信していきたいということだった。私も将来、そういう活動のお手伝いができる立場でいたいと思った。今から身近でできることもたくさんあると思う。実際に、身近な避難場所や経路を確認すること、家族ともっと真剣に話し合わないといけないと思った。講話の際に教えていただいた新聞紙でスリッパを作る方法等も、とても役立つと思った。首都直下型地震がやってくる時に備えて、自分、家族、友だち、町の人々の多くの命を救う手助けができるようにしたい。	生徒
家族の命、自分の命を大事に、日頃から意識したいと思う。守られるのではなく、守る人になりたいと思う。まだ今は、誰かに守られている時があるけれど、それを逆にできるよう、自分にできることはやり、日頃から慣れておきたいと思った。そうするには、ボランティアに参加する等、自発的に取り組んでいきたいと思う。	生徒
避難所の開設・運営に特に興味を持った。震災後、死傷者や病人、トラブル対応と、先生方のストレスは計り知れないと思う。そんな混沌とした中で、生徒への指示を丁寧に出すのは難しいと思う。だから、震災が起きた時、生徒兼防災士として生徒と先生のパイプ役になりたい。	生徒
私が今後取り組んでいきたいのは、日々の防災意識の向上だ。研修前は、災害？怖い―くらいにしか思っていなかった。被害を少なくすることが重要であると学んだ時、家ではガス栓を開けっ放しだったり、電気もつけっ放しにしてしまうことがあると気付いた。災害を少しでも大きくしないよう努めていこうと思った。	生徒
生徒たちと同じ目線で考えさせられることも多く、とても貴重な経験をさせていただいた。教師として、様々な意見や話を聞かせていただく場面があったり、生徒たちと一緒に体験する中で、今の高校生たちの様々な面を感じることができた研修でもあった。この経験は、勤務校での指導に必ず役立つと感じている。防災教育はもちろん、生徒指導の場面でも生かせるよう、日々研鑽を積んでいきたい。	教員
有事の際、学校には非常に様々な役割が求められる。生徒の命を守りきる砦としての役割、避難所として地域住民を受け入れる役割、行政と連携した情報センター的な役割、生徒の心のケアをするカウンセリング的役割、そして当然、教育的役割。非常に多くのことが多岐にわたり、どれ一つたりとも欠けてよいものではない。	教員

合同防災キャンプ 2016 報告書

東京都教育委員会印刷物登録

平成 28 年度第 211 号

平成 29 年 3 月 1 日

編集・発行

東京都教育庁指導部指導企画課・高等学校教育指導課

〒 163-8001 東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号東京都庁第一本庁舎北側 38 階

電話番号 03-5320-6836

編集協力・印刷

株式会社ＪＴＢコーポレートセールス

防災
CAMP
2016